聖書と説教　　2024 年 12 月 8 日（日）待降節第 2 主日

新約聖書 ルカによる福音書 3 章 1 節―6 節（新共同訳）

[1] 皇帝ティベリウスの治世の第十五年、ポンティオ・ピラトがユダヤの総督、
ヘロデがガリラヤの領主、その兄弟フィリポがイトラヤとトラコン地方の領主、
リサニアがアビレネの領主、[2] アンナスとカイアファとが大祭司であったとき、
神の言葉が荒れ野でザカリアの子ヨハネに降った。[3] そこで、ヨハネはヨルダ
ン川沿いの地方一帯に行って、罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣
べ伝えた。[4] これは、預言者イザヤの書に書いてあるとおりである。「荒れ野
で叫ぶ者の声がする。『主の道を整え、／その道筋をまっすぐにせよ。[5] 谷は
すべて埋められ、／山と丘はみな低くされる。曲がった道はまっすぐに、／で
こぼこの道は平らになり、[6] 人は皆、神の救いを仰ぎ見る。』」

※第 1 朗読と第 2 朗読は末尾に掲載

説教「神の救い」

イエス・キリストの「先駆け」であり、ヨルダン川において、イエスに洗礼を授けた人物である洗礼者ヨハネは、キリスト教絵画でも頻繁に描写され、崇敬される人物です。

それらの絵画の中で最も有名なものの一つに、レオナルド・ダヴィンチの「洗礼者ヨハネ」の作品があります。

その絵の中で、洗礼者ヨハネは、らくだの毛皮に身を包み、神秘的な謎めいた微笑をたたえ、左手に葦の十字架を持ち、右手は天を指しています。

絵画において、洗礼者ヨハネはそれぞれの画家ごとに、全く異なる容姿で描かれています。

実際の洗礼者ヨハネは、どのような風貌（ふうぼう）だったのだろうとも思わされます。

ですが聖書では、洗礼者ヨハネのことを「荒れ野で叫ぶ者の声がする」という言葉で表しています。ヨハネの容姿や外見がどのようであったかよりも、ヨハネは「荒れ野で叫ぶ声」であったことに、私たちの意識を向けることが促されているように思えます。

本日のルカによる福音書は、荒れ野において洗礼者ヨハネに神の言葉が降った時の歴史背景、政治的状況の記述から始まります。

まず、その時代のローマ帝国の皇帝や、その皇帝に任命されたユダヤの総督ポンティオ・ピラト、当時の領主たちの名前が挙げられ、そして、大祭司二人 アンナスとカイアファの名が挙げられます。神の救いは、この世と別世界で起こ

ることではありません。洗礼者ヨハネに神の言葉が降ったのは、それらの権力者たちが支配する時代の只中であり、この世の現実の中で起きたのだと、ルカ福音書は示唆します。

洗礼者ヨハネは、エルサレム神殿に奉仕する祭司ザカリヤの子でした。ヨハネの誕生は、祭司ザカリヤが神殿で香をたいていたとき、天の御使いによって予告されました。神殿にその出生のルーツを色濃くもつヨハネでしたが、ヨハネ本人はエルサレム神殿には仕えずに荒れ野で生活していました。おそらくヨハネは、「相当な変わり者」「はみ出し者」という目で、世間からは見られていたことでしょう。そのような中、神の言葉がヨハネに降ったのです。

神の言葉を受けたヨハネは、ヨルダン川沿いの地方一帯に行きます。それは「罪の赦しを得させるため」に「悔い改めの洗礼」を人々に宣べ伝えるためでした。

「洗礼」はギリシア語で「バプテスマ」です。この言葉はもともと「水に沈めること、浸すこと」を意味しています。洗礼者ヨハネが行っていた洗礼とは、ヨルダン川に人の全身を沈めるものでした。一度水の中に沈み、そこから立ち上がることは、古い自分に死んで新たな命に生きることを表します。

「悔い改め」（ギリシア語でメタノイア）の元の意味は「心を変えること」です。悔い改めとは「心を神に向け、神に立ち返る」こと。古い自分に死んで、新たに神と共に生きる、ということです。これは「罪のゆるし」に繋がります。

「罪」とは、創造主なる神と共に生きる道からそれ、神と断絶してしまうことです。神はそんな人間に、大きな悲しみをもって「（あなたは）どこにいるのか」（創世記 3:9）と言われます。私たち人間は、罪のゆるしによって、再び神と真っ直ぐに繋がることができるのです。

しかし、この「罪のゆるし」についてのことが、人間の都合によって利用されている現状がありました。

当時、人々は罪のゆるしのために、決められた献げ物をエルサレム神殿へ繰り返しささげるように教えられ、「奉献」、すなわち献げ物の形で搾取されていました。ゆえに多くの貧しい庶民が搾取され、その上、十分な奉献ができない罪悪感と恥の意識に縛られていました。

これに対して、洗礼者ヨハネは、誰でも洗礼を受けて神を信じて生きるようになれば、全ての罪が赦され神の国に入る準備が与えられることを告げました。

ヨハネのこの宣言は革新的であり、搾取され困窮した民衆にとって、根底から解放され心が救われるものでした。

洗礼者ヨハネは、神殿を必要のないものとするかのように、ヨルダン川での洗礼による罪の赦しを宣べ伝えていました。これは当時の、神殿を中心とする宗

教的な秩序を壊すようなことでした。洗礼者ヨハネは、主が戻って来られるのを、神殿の外に出て迎えるようにと勧めたのです。

洗礼者ヨハネの出現は、旧約聖書のイザヤ書 40 章 3 節の成就として、次のように言われています。「荒れ野で叫ぶ者の声がする。『主の道を整え、／その道筋をまっすぐにせよ。谷はすべて埋められ、／山と丘はみな低くされる。曲がった道はまっすぐに、／でこぼこの道は平らになり、人は皆、神の救いを仰ぎ見る。』」（ルカ 3:4-6）

荒れ野で叫ぶ者の声とは、洗礼者ヨハネの声のことです。洗礼者ヨハネののちに出現するイエスは、「わたしは道である」と言いました（ヨハネ 14:6）。洗礼者ヨハネは、人々が主イエス・キリストと共に真理と希望と喜びの道を歩むための、その道筋を整える役割を担っていました。

「谷はすべて埋められ、山と丘はみな低くされる」という言葉は、現実の社会での中での弱い者や困窮に苦しむ者への神の豊かな恵みを示すものです（ルカ 3:5）。つまり、神の福音がこの世界に直接働きかけ、救いと恵みを現実化させることが意図されているのです。

洗礼者ヨハネは、人々を主イエス・キリストに導いていくための「荒れ野で叫ぶ声」として、民衆に罪の赦しと悔い改めについて宣べ伝えました。（ルカ 3:4）

自分のふるさとでもある華々しい神殿から遠く離れた、荒涼とした荒れ野において、洗礼者ヨハネは神の計画に従い、神の御心を行ったのです。

ローマの信徒への手紙にこう記されています。「宣べ伝える人がなければ、どうして聞くことができよう。遣わされないで、どうして宣べ伝えることができよう。『良い知らせを伝える者の足は、なんと美しいことか』と書いてあるとおりです」（ローマ 10:14-15）。

神から遣わされた洗礼者ヨハネは、人々に「良い知らせ」を宣べ伝えたのです。

主イエス・キリストの生誕の時であるクリスマスを待ち望むこの待降節（アドベント）の期節には、毎年、洗礼者ヨハネについての福音書が読まれます。

「荒れ野で叫ぶ声」とは、私たちが大きな苦難や困難の中にいる時、あらゆるこの世の虚飾が取り払われ、削ぎ落とされた荒れ野において、私たちが真（しん）に神の救いと真理を求めて、叫ぶ声でもあるのではないでしょうか。

クリスマスまで、あと 2 週間ほどとなりました。

私たちは、クリスマスを待ち望むこの期間を、慈しみ大切にしながら、希望と喜びのうちに共に歩んでいきましょう。

お祈りをします。
全能の神様。私たちが様々なことに心乱される時も、私たちの行く道を照らし、まっすぐに歩ませてください。私たちが、愛と慈しみをもって、あなたと共に日々を歩んで行くことができますように。御子 主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン

＊＊＊＊＊＊ 説教ここまで ＊＊＊＊＊＊

以下、本日に関連する聖書箇所（第１朗読と第２朗読）です。

旧約聖書 マラキ書３章１節―4 節（新共同訳）

[1]見よ、わたしは使者を送る。彼はわが前に道を備える。あなたたちが待望している主は／突如、その聖所に来られる。あなたたちが喜びとしている契約の使者／見よ、彼が来る、と万軍の主は言われる。[2]だが、彼の来る日に誰が身を支えうるか。彼の現れるとき、誰が耐えうるか。彼は精錬する者の火、洗う者の灰汁のようだ。[3]彼は精錬する者、銀を清める者として座し／レビの子らを清め／金や銀のように彼らの汚れを除く。彼らが主に献げ物を／正しくささげる者となるためである。[4]そのとき、ユダとエルサレムの献げ物は／遠い昔の日々に／過ぎ去った年月にそうであったように／主にとって好ましいものとなる。

新約聖書 フィリピの信徒への手紙１章３節―11 節（新共同訳）

[3] わたしは、あなたがたのことを思い起こす度に、わたしの神に感謝し、[4] あなたがた一同のために祈る度に、いつも喜びをもって祈っています。[5] それは、あなたがたが最初の日から今日まで、福音にあずかっているからです。[6] あなたがたの中で善い業を始められた方が、キリスト・イエスの日までに、その業を成し遂げてくださると、わたしは確信しています。[7] わたしがあなたがた一同についてこのように考えるのは、当然です。というのは、監禁されているときも、福音を弁明し立証するときも、あなたがた一同のことを、共に恵みにあずかる者と思って、心に留めているからです。[8] わたしが、キリスト・イエスの愛の心で、あなたがた一同のことをどれほど思っているかは、神が証ししてくださいます。[9] わたしは、こう祈ります。知る力と見抜く力とを身に着けて、あなたがたの愛がますます豊かになり、[10] 本当に重要なことを見分けられるように。そして、キリストの日に備えて、清い者、とがめられるところのない者となり、[11] イエス・キリストによって与えられる義の実をあふれるほどに受けて、神の栄光と誉れとをたたえることができるように。

教会讃美歌 131 番「聖なる聖なる」1,2,4 節、240 番「み言葉によりて」1,2,3 節、382 番「ここは神の」1,2,3 節、199 番「主よいま去りゆく」1,2,3 節